

作品タイトル「美しい風景」

著者名：うめ

あらすじ：

男は陰鬱なニュースばかり流れる TV を捨て、代わりに絵を鑑賞することにした。友人から譲り受けたその絵は、自分の住む場所とは真逆の世界で、さらに絵の中では時間が流れているという不思議なものだった。美しいものだけを眺めていられることに満足していた男だったが、ある日風景に変化が現れる。

特記事項：

戦争のニュースを見ている時を思い浮かべて書きました。

本編の文字数：4973字

本編：

最近の TV の話題は、もっぱら暗い。

窃盗、事故、詐欺、戦争、そんな陰鬱なニュースばかりでは気が滅入ってしまう。

だから、思い切って TV を捨てることにした。

TV を処分して、幾分かすっきりしたものの、すぐにぽっかりと空いてしまったリビングのスペースに物足りなさを感じるようになった。

毎日壁だけを眺めているのはつまらない。

友人と食事をしている時にこの話をすると「絵を置いてみたらどうか？」と提案してきた。

「これまで一度も絵なんか買ったことがないからなあ。何を買えばいいかわからないよ」

私がそう言うと、友人が自分の持っている絵を譲ると言い出した。

「ありがたいけれど、本当に絵の価値なんてわからないんだ。気の利いた感想なんて期待しないでくれよ」

「仕事一筋の君にそんなこと期待してないさ。なあに、そんなに身構えなくても大丈夫。絵を見るのに歴史も知識も必要ない。普通の風景画なんだから気楽に眺めていればいいさ」そして友人は、後日私の家に絵を送ると言った。

数日後、絵が届いた。

興味がないように振舞っていたが、ひそかにどんな絵が届くのか気になっていた。私は、いそいそと包みを開けた。

そこに入っていたのは、金の額縁におさめられた満点の星空の絵だった。

「こんな星空は、ここでは見られないな」

窓の外には、空に向かって競うように伸びていく高層ビルが並んでいた。

どこを見渡しても高層ビルが隊列を組んで、空を覆っている。ここには空がないのだ。それどころか、夜になっても明かりが消えることがないから、星が夜空に浮かぶこともない。

「真逆の世界だな」

私は、さっそくその絵をリビングに飾ってみた。朝の太陽の光が差し込むリビングに、深い藍色の夜空に無数の星が輝いているその絵は、合わない気もした。

しかし、今はこのスペースになにかを置きたい。

少し考えたが、このまま絵を飾ることにした。別の絵を買ったら、これを寝室にでも移動すればいいだろう。寝室のほうが合いそうだ。

私は部屋の隅に立ち、リビング全体を眺めた。

私は頷いた。物足りなかったスペースに絵がすっぽりと納まっていて、部屋が完成されたように思えた。何よりその絵を気に入っていたのだ。

夜になり、帰宅した私は、リビングに入るとすぐに違和感を覚えた。

今朝とは何かが違う。注意深くリビングの中を観察していると、あることに気づいた。

私は、恐る恐る絵に近づき、真正面から絵を眺めた。

絵が変わっている。

綺麗な星空は、雲一つない青空に変わっていた。そして、青空の下には小さな村があった。

私は、眉をひそめた。そして、部屋を見渡してみた。

絵以外は、部屋は出勤した時と変わりはない。空き巣に入られた気配もない。いや、空き巣なんか入るわけない。高層マンションの一室に外から入ってくるなんてありえない。

もう一度絵を眺める。

昼間の様相に変わった絵の風景に見覚えはなかった。

私は、がっかりしていた。あの夜空の風景が気に入っていたからだ。もう見れなくなってしまったのだろうか。

私は、倒れこむようにソファに座った。仕事の疲れも相まって、何もする気が起きなかった。なんとも不思議な絵だった。

あの夜空の風景ほどのインパクトはないが、引き込まれる絵だった。

この澄みきった青空は、1年中光化学スモッグで空にモヤがかかっているここでは見ることはできないだろう。深く深呼吸を試みる。

村の建物は、冷たい鉄筋や灰色のコンクリートなどではない、素朴な木材などで作られているみたいだ。暖かな太陽の光に照らされている。鳥のさえずりやそよ風の音が聞こえるようだった。

キラキラとした太陽の光も突風が窓に吹きつく音もない。締め切りに追われて自分や周りの人間が神経質になったり、急き立てられるように徐々に秒針の音が大きくなって苦しくなることもないのだろう。この村の時間はゆったりと流れている。

気が付くと、絵を眺めたまま、1時間が立っていた。

ソファから立ち上がって、思いっきり伸びをした。
なんだか、身体が軽くなったようだった。それに、頭もすっきりしている。
いつもは泥のように重い身体を引きずって、洗面所に向かっていたが、今日は、足取りが軽かった。

朝。

リビングに入ってすぐに首を傾げた。絵が元に戻っている。
わけがわからず、顔を近づけて細部まで観察してみたが、それは、まぎれもなく一番最初に目にした夜空の風景だった。

私は、携帯を手を取った。

友人に連絡するためにメッセージボックスを開く。

「君からもらった絵が勝手に変わってしまうのだが、どうしてだろう？」

文面を見て、少し不安になったが、そのまま送った。

頭がおかしくなったと思われないだろうか。

すぐに友人から電話がかかってきた。

「やあ、どうだい？僕の送った絵は気に入ってくれた？」

「そんなことより。なんなんだ、これは？」

「僕も詳しいことは分からないんだ。どうやら、絵の中で時間がたっているみたいだ」

友人は得意げだった。私の反応を楽しんでいるのだ。

「そのようだね。驚いたよ」

友人は笑った。

「僕も最初は君と同じだったよ」

私は、ふんと鼻を鳴らした。すると、友人は何かを察し、残念そうに聞いてきた。

「……もしかして、気味悪くて処分したいから連絡してきたのかい？」

私は絵に近づいてじっと見つめた。

「気味は悪いが、処分するのはおしいな」

友人が電話の向こうで何度も頷いているのがわかった。

「だろうね。僕も気に入っていたよ」

「？それなら、なんで私に譲ったんだ？」

「僕はその絵を買ったバイヤーからもう一回り大きいものを買ったんだ」

「なるほど。ちょうど処分に悩んでいた時に、私の話を聞いたということだな」

「とても助かったよ。君ももっと大きいのが欲しくなったら言ってくれ」

私は、また今度飲みに行こうと伝えて、電話を切った。

友人のイタズラっぽい笑みが頭に浮かんだ。自分が驚いていることを楽しんでいたことはやや気に食わなかったが、まあいい。おかげでこの風景が毎日見れるのだから。

今日も夜空の星は煌めいていた。

毎日絵を眺めていると、景色が日によって変わっていることに気づいた。
快晴の日もあれば激しいスコールのような雨が降る日もあった。
ほとんどが同じような1日の流れの平凡な日だった。
いつしか村人が現れるようになった。
数人で集まって談笑する女性たちや、荷車で大きな荷物を運ぶ男性や、おいかけっこをしている青年など。現れる人物は日によって違った。
人も自然も規則正しく、整然とした動きだった。それでいてのどかな時間が流れている、そんな気がした。
たくさんの人が現れるようになったが、その中でも頻繁に現れたのは、年の離れた姉妹だった。
家事の手伝いをしたり、手伝いが終われば花を摘んで遊んだり、手遊びをしたり、夜は星を見たり、昼夜問わずその姉妹は現れた。
姉はまだ少女のように思われたが、まだ幼い妹がいるからだろうか。大人びた雰囲気をもっており、いつも妹に慈愛に満ちた微笑みを向けていた。
幼い妹は姉に甘え切っているようだ。
姉妹の様子を眺めているのが、最近の私の一番の楽しみであった。
稀にお祭りなども行われた。
目が痛くなるような派手な電飾ではなく、採取してきた花で建物を飾り付け、見たこともない色の不思議な衣装で着飾った村人たちが、踊ったり歌ったり朝まで楽しんでいる様子が見れた。
姉妹は祭りの御馳走を食べて、とても幸せそうだ。
いつもと違う風景を写真にとっておこうかと思って、私はカメラを構えたが、すぐにやめておいた。
こういうのは一期一会だ。その時しか見れないものを楽しむのが良いのだろう。
私は家にいるときはほとんどの時間を、お気に入りのレコードを聴きながら、絵を眺めて過ごしていた。

仕事が忙しくなってきた。
暗いニュースに振り回されたくないが、嫌でも携帯で最近のニュースをチェックしなければいけなくなった。
昨日、ミサイル攻撃でどこかの町が消え去ったらしい。見たこともない光景だったと、難を逃れた人たちが口々にインタビューで答えていた。
会社でもその話題で持ちきりだった。
現地の派遣スタッフによると、どうやら、■■社の新作兵器のようだ。そんなものを作っていたなんて、社内のだれも知らなかった。反撃には、うちの商品も使われるだろう。

朝から息つく暇もなく仕事に集中していると、いつの間にか外は真っ暗になっていた。忙しなく動き続ける時計を見上げて、私は立ち上がった。疲れ切って帰宅した後は、リビングに寄ることなくベッドに倒れ込んだ。

朝。

絵が見たこともない光景になっていた。

夜空に流星群のような無数の光が流れていた。赤や緑、青などさまざまな色で夜空に線を引いていく。

村人たちは、通りに出て、みなそれらを見上げていた。

人だかりの中にあの姉妹もいた。姉妹は夜空に向かって大きく両手を振っていた。後ろから若い大人の男女が二人の肩を抱きしめている。両親のようだ。

見たこともない景色だった。

真っ暗な空に煌めく星々を流星が繋ぐように流れていく。

ずっと見ていたかったが、携帯にひっきりなしにメッセージが入ってくる。

早いとこ、出勤しなければ。

後ろ髪を引かれる思いで、家を出た。

夜。

疲れ切った私は身体を引きずるようにしてリビングに入った。ベッドに直行しなかったのは、今朝の絵が気になったからだ。

リビングに入ってすぐ目を凝らした。足早に絵に近づく。

絵が真っ黒になっている。黒い絵の具で塗りつぶされたみたいだ。

しばらく、眺めていたが変化がない。

額縁を掴んで、壁から取り外してみた。くるくると回して絵を色んな角度から見てみるが、特に変わったところはない。絵を上下に振ってみる。やはり変化はない。

友人に尋ねてみようかと考えたが、そこまでできるほどの体力は残っていなかった。

絵を元の場所に戻して、リビングを後にした。

あくる朝、リビングに入ると、私は安堵した。絵が元に戻っていると思ったからだ。だが、近づいて見て、目を丸くした。よく見ると、以前とは全然違う風景だった。

すぐに携帯を取り出した。

友人の眠そうな声が聞こえてきた。私は、昨日からのことを捲し立てるように話した。

友人は大きくあくびをした。

「なんだ、そんなことか。朝からびっくりさせないでくれ」

「ということは、君はこのことも知っていたんだな」

「ああ、私が持っていた時も同じことがあったよ。どうやら定期的に風景が変わるみたいな

んだ」

「以前のはもう見れないのか？」

友人は困ったように笑った。

「見れないだろうね。僕も君に渡す前に見た風景が気に入っていたから、変わってしまって、とても残念だったんだよ。待っていたらまた見れるんじゃないかと思っていたけれど、無理みたいだ。そうこうしているうちに気に入った絵を見つけたから、君にそれを譲ったんだ」
私が未練たらしく唸っていると、友人がたしなめるように言った。

「まあ、あきらめた方がいいね。それに、君、失うからこそ尊いだろう」

「そうだけれども……」

深いため息をついた。友人は明るい声で言った。

「まあ、そんなに落ち込むなよ。僕の馴染の画廊を紹介するから。新しいものを買うお金はあるんだろう？ 儲けているそうじゃないか」

「ああ、おかげで残業続きだよ」

「そうだろうな。昨日も例の新兵器を使って、ミサイル攻撃が行われたみたいじゃないか。また売れるな」

「全くばかばかしいな。そんなことを繰り返して何の意味があるのか。彼らにこの絵を見せてあげたかったな。いきり立った人間もこれを見ればすぐに隠居した老人のように何もしなくなるだろうに」

「ずいぶんイラついているみたいだな。そんなに気に入っていたのか？」

「ああ、特に昨日の風景は本当に美しかった。これまで見た夜空で一番神秘的に輝いていた。あれは人工的には作り出せないものだろうな」

「ふむ、それは僕も見てみたかったな」

「君もきっと気に入ったよ」

「どうだろう。きっと僕のお気に入りの風景の方がよかったと思うな」

私は、朝早くに連絡したことを謝り、電話を切った。

携帯の画面には、電話している最中に届いた仕事のメッセージがびっしりと並んでいた。

私は携帯をソファの上に放った。

新しい絵の風景は、どこか海辺の街のようだ。爽やかな潮風が心地よさそうだ。

あわよくばずっとこんな美しい風景だけをみられたらいいのに、そう思いながら、ため息をついた。